

中世の遺構と遺物

調査区は、福井城百間堀の前身である吉野川の東西両岸に位置する。西岸調査区の遺構面は、北庄城築城（1575年）を境として、それ以前 北庄期 と以後 北庄城期 とに大きく分けられ、それぞれに複数の遺構面が確認される。北庄期の遺構面は2～3面確認され、整地・盛土などが繰り返し行われたことが窺える。さらに北庄城期は、歴史的に北庄城落城（1583年）を境とし、柴田勝家とそれ以降の段階とに分けられる。吉野川東岸調査区の遺構面は、16世紀半ば以前と16世紀後半期の2面を確認した。

1. 遺構

吉野川西岸調査区 吉野川西岸調査区で検出した中世の遺構は、石垣・通路状遺構・砂利敷道路・井戸・土坑などがある。これらのうち主要なものについて、以下に詳細を記述する。

なお、砂利敷道路や区画溝は、嵩上げや再掘削が繰り返し行われ、それらの規模や位置が少しずつ変化することから、土地区画の変遷の様子が捉えられる。ここでは、道路や溝など個別遺構の詳細は観察表に譲り、確認される区画の変遷を中心に詳述する。

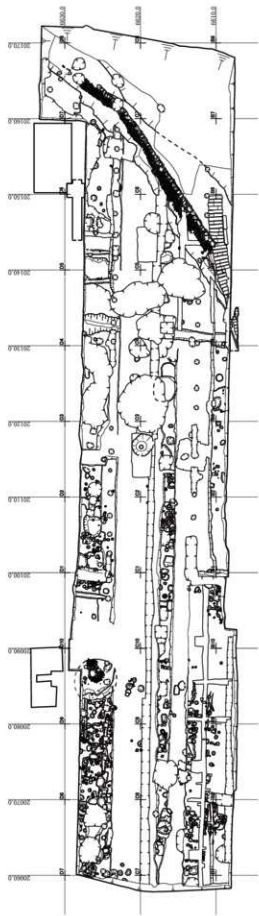
石垣 石垣は、吉野川西岸のみ認められる。福井城の石垣である石垣・の下層に位置すること(図8・9・11)から、石垣 とする。石垣 は、福井城築城の直前に機能していた石垣である。

検出した石垣(図106)は、北東-南西方向に直線的に延びる。検出した部分の総延長は約26.5m分であり、裏込栗石のみの検出箇所をも含めると約29mに及ぶ。石垣石材は概して2石前後が積まれた状態で残存しており、その高さは0.4～0.9mである。最も良好に残存する箇所でも3分の石垣石材が残存するのみである。裏込栗石は石垣の倍近い高さで残存しており、標高7.0m付近にまで及ぶことから、本来の石垣も同様な高さであったと見られる。また、石垣の背後には、石垣と同時代に並存したと見られる砂利敷道路がある(図107)。路面は標高7.9m前後に整備されており、石垣の高さもこれに近いものと見られることから、本来の石垣の高さは3mに近いものであったと推測される。

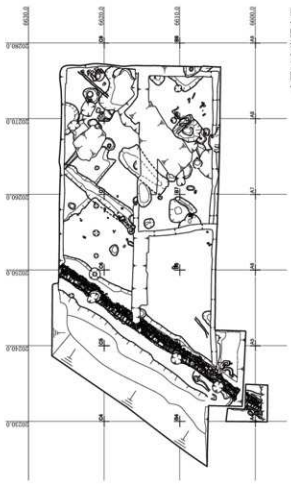
石垣の下端は、概ね標高4.5m前後であるが、西から東へやや下降する。石垣の基礎構造として、胴木組などはとくに存在しない。最下段の石垣石材がやや小振りであるのは、根石として埋め込まれた石材であったためである。堆積状況図(図9・10)から石垣の根石を埋め込む状況が確認され、それによると標高約4.8mでほぼ平らに埋めている。そして、石垣の下端が西に向かって緩やかに高くなることから、石垣南端の下段の石材3分はほぼ露出する状況であったようである。

石垣の南端部分は、板石敷通路状遺構の上に載せて構築される(図107・図版32・33)。南端の石材は正面だけでなく南側面にも鑿調整が施されており、隅角を意識するかのようである(図版32下)。下段の小振りな石材にも隅角を意識した鑿調整がされることは、南端付近の下段石材が埋め込まれなかったことの傍証となろう。また、裏込栗石の集積も石垣南端付近で途切れることから、栗石の流出を防止するために、土を被せて敲き締め固定したことが推測される。

石垣に使用される石材は、いずれも笏谷石であり、粗割り状態の歪な形状で、自然面をそのまま残す



吉野川西岸調査区

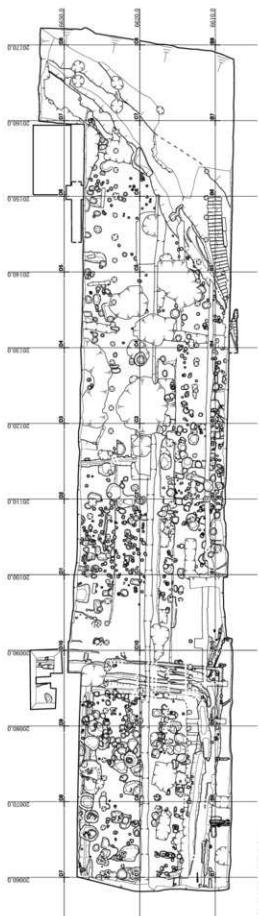


吉野川東岸調査区

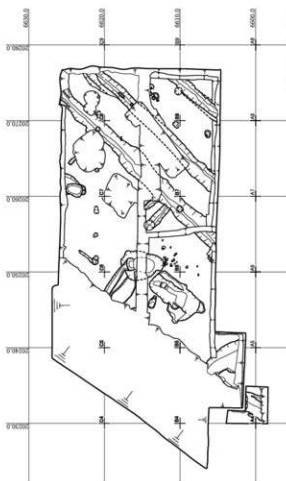
◎吉野川西岸調査区……中世上層

◎吉野川東岸調査区……(中世末~)近世初頭

図98 中世の遺構① (S=1/500)



吉野川西岸調査区



吉野川東岸調査区

◎ 吉野川西岸調査区……中世下層

◎ 吉野川東岸調査区……中世



図99 中世の遺構② (S=1/500)

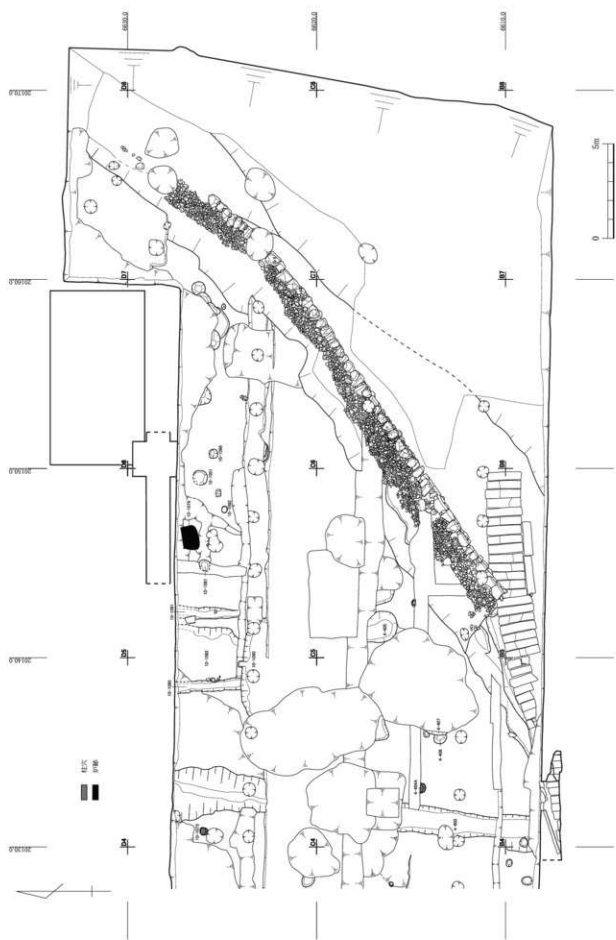
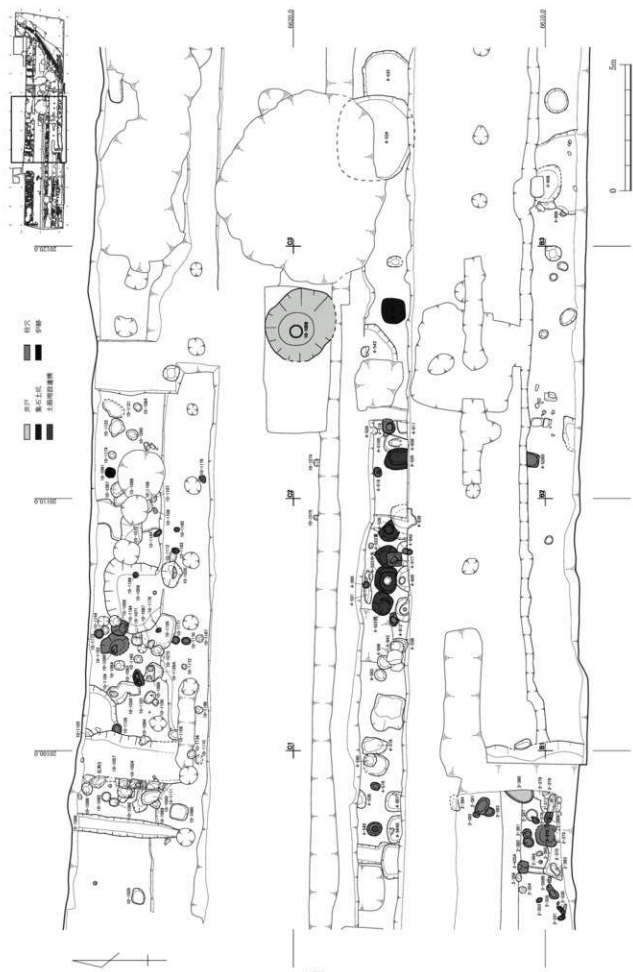


图100 吉野川西岸跡基区遺構配置 上層① (S=1/200)



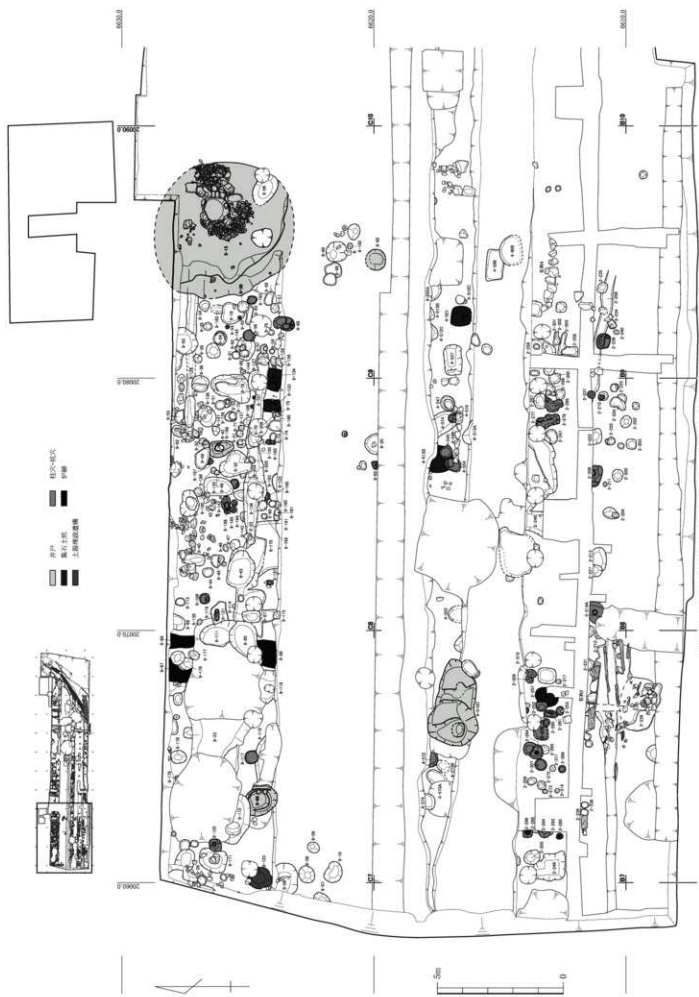


図102 古野川西岸調査区遺構配置 上層③ (S=1/150)

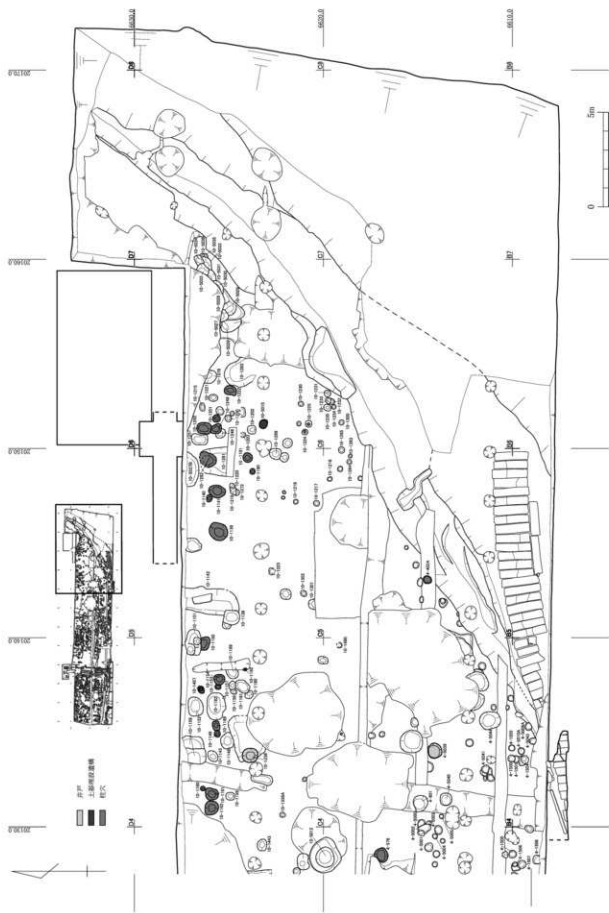


图103 吉野川西岸緑化区植林配置 下層① (S=1/200)

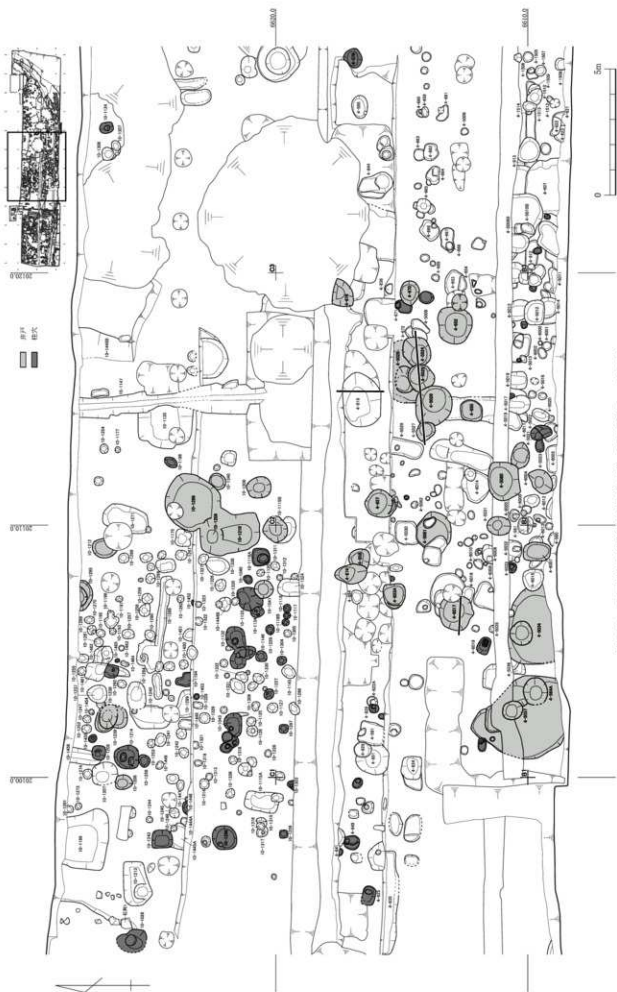


图04 吉野川西岸調査区遺構配置 下層② (S=1/150)

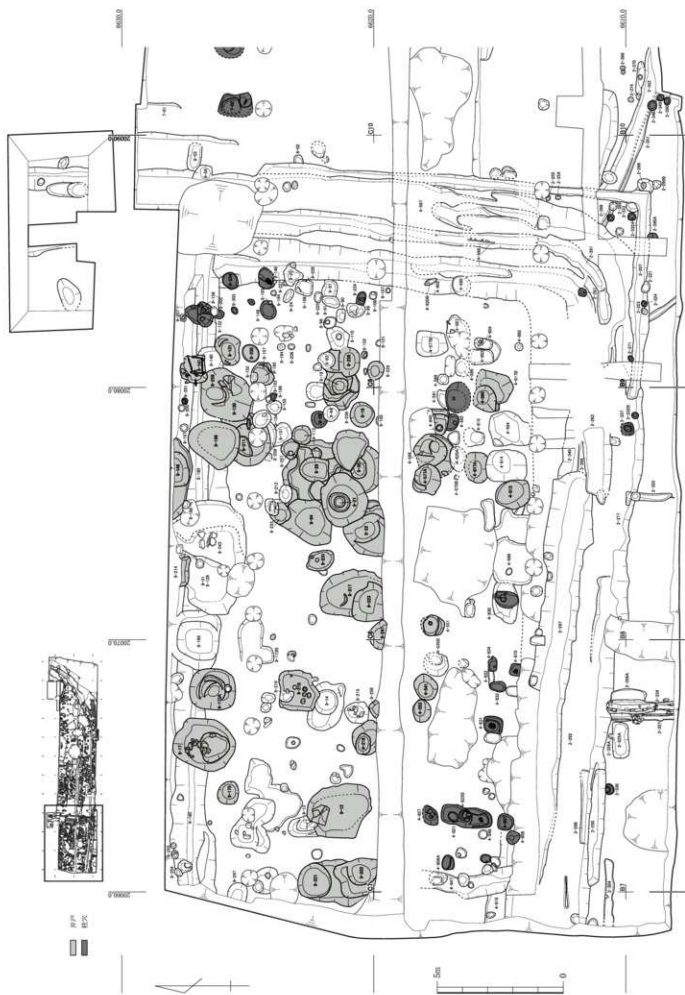


图105 吉野川西岸調査区遺構配置 下層③ (S=1/150)

ものも多い。石垣正面は、平坦に整えられているようであり、鑿などによる調整痕の残るものも認められる。しかし、笏谷石の石質上、表面が剥落し、さらに磨耗したような状態の石材が多い。石材の中には、全面に丁寧な鑿調整が為されたり、被熱して煤けたりする転用材も確認される。裏込栗石中にも煤けた石材が多く確認され、また、石瓦や石塔部材などの栗石中の混入は他の石垣と比較して量が多い。

各石材の石垣正面における寸法(表 38)は、高さ 0.2~0.5m・横幅 0.2~0.9mと大きなばらつきがあるが、そのうち高さ 0.25~0.3m・横幅 0.4~0.5mを正面寸法とする石材が多い。この寸法は、石垣や東側石垣の石材とほぼ同等である。石材の寸法は、高さ 0.25~0.3m・横幅 0.3~0.4m・奥行 0.45~0.6mの範疇に含まれるものが多く、これは他の石垣の石材より小さい寸法である。すなわち、石材を横位で使用する例が多い。なお、石垣石材 92点中には、刻印・墨書などは確認されなかった。

石垣は、板石敷通路状遺構の部分で途切れるが、これは通路を確保するために意図して区切ったものと考えられる。調査地南端が板石敷きに重複する位置関係で、石垣南端が調査地にバランスよく納まることから、恰も石垣はそこを起点に北側に延びるものと錯覚してしまう。しかし、石垣背後の砂利敷道路はまだ南側に延びる状況を示しており、通路として確保されたスペースの南側にも石垣が延びることが考えられる。

通路状遺構 通路状遺構は、板石を階段状に並べた板石敷通路状遺構と、素掘りの通路状遺構があり、両者は同一地点にて重複して構築される(図 115)。そのため、両者は、先後関係が明らかであり、機能・利便性の向上のための改修が行われた同一の遺構であると認識される。

板石敷通路状遺構 板石敷通路状遺構(図 110・図版 33・34上)は、西南西から東方へ下降し、緩やかに湾曲しつつ延びる。検出した階段部分の総延長は約 20m分である。あと 1m程度あるいは数段分、石垣背後の砂利敷道路と高さが揃う(図 107)。検出した階段の最上段は標高約 7.5m、最下段は標高約 4.2mであり、その比高は 3.3に及ぶ。板石は 40数枚を確認した。このうち 2枚は階段南縁に沿って配される。また、西端では階段北縁に沿って複数の扁平な石材が立て並べられる。階段の段差は、板石が上下に重なることは少なく、おもに隣り合う板石に高低差を付けて設置することで形成されている。そのため、各段差は比較的小さく、とくに東側の先端部付近では緩やかなスロープ状を呈する。

使用される板石は、いずれも笏谷石製である。粗割り状態の歪な形状であるが、ところどころに鑿による粗い調整痕が残る。表面は、使用のために磨耗したようであり、滑らかである。各板石の寸法(表 39)は、横幅(長さ) 1.75~2.05m・奥行(幅) 0.4~0.52m・厚さ 0.12~0.19mと大きなばらつきがある。しかし、横幅 1.77~1.81mと 1.85~1.9m、奥行 0.43~0.46m、厚さ 0.13~0.16mの範疇の石材が多く、このうち横幅 1.85m・奥行 0.43m・厚さ 0.13mとする寸法が最も多い。

使用される板石の寸法がだまかにではあるが揃うことから、部分的にしか確認されていない石材が多いものの、ある程度の復元が可能である(図 107・110)。それによると、板石敷通路状遺構は、ほぼ中央付近、B5杭の辺りで、小さく屈曲することが確認される。この屈曲部分から西側は、石垣の延長線上に沿うように延びており、この屈曲部分付近に、南側へ延びる石垣の北端部があったことが考えられる。なお、この西側の板石敷き上の堆積状況(図 109)によると、板石より数10cmは比較的細かな自然堆積層があり、標高 5.8m前後から上には笏谷石破片の混入する石垣構築(福井城築城)に関わる大規模な造成土が確認される。東端部付近の板石敷き上には、暗灰黄色の細かな砂が石垣から離れるに従って分厚く堆積するのを確認しており、その部分が水に浸かる状況であったことが示される。

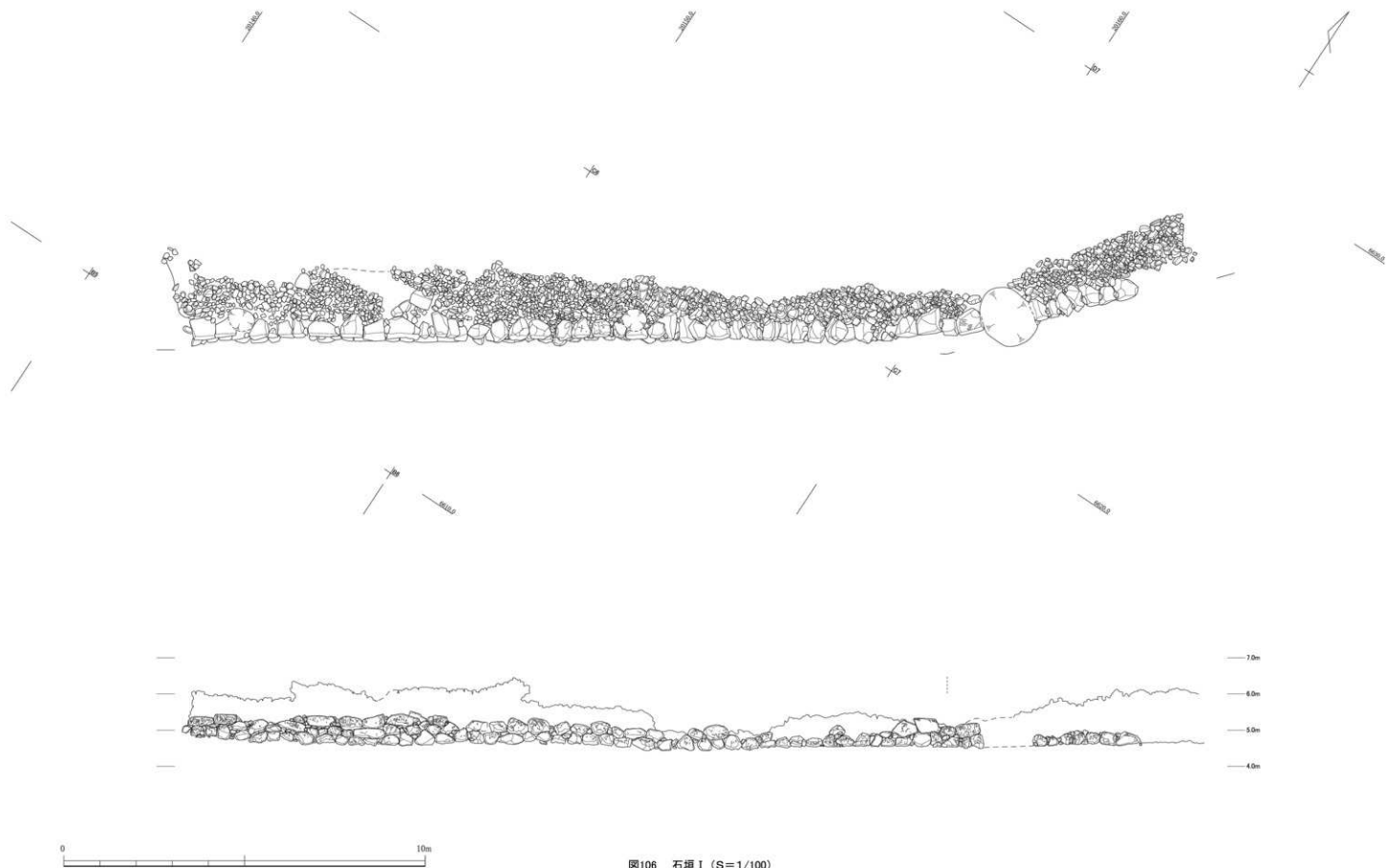


图106 石垣 I (S=1/100)

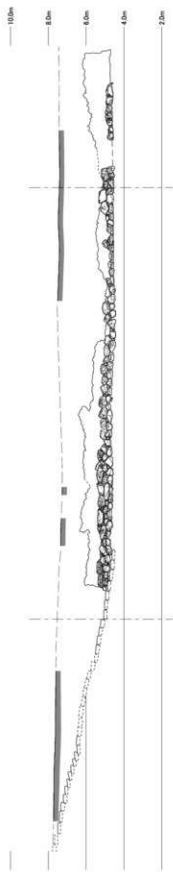
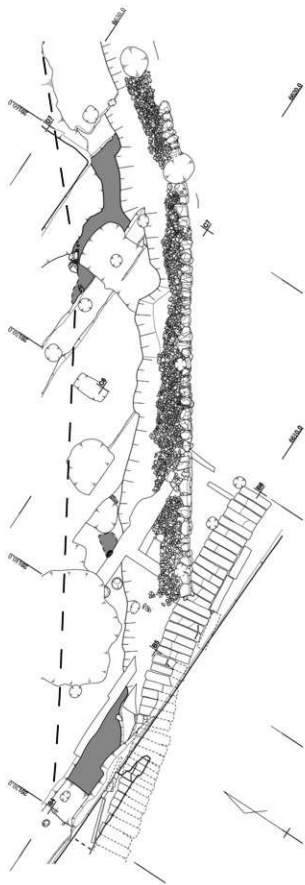
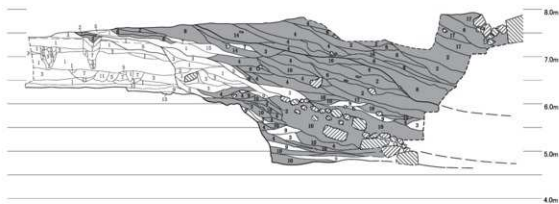


图107 石垣 I と砂利敷 (S=1/200)

砂利敷

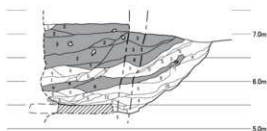




No.	土名	土質	炭化物	粘土	雑物	貫入長(cm)	木の杭の長(cm)	備考
1	褐色	1P191/4	粘質土				少(4.0-5.0)	
2	褐色	1P191/4	粘質土				少(4.0-5.0)	
3	黒褐色	2.3Y2/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
4	黒褐色	2.3Y2/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
5	暗灰褐色	2.3Y2/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
6	暗灰褐色	2.3Y2/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
7	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
8	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
9	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
10	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	部分多量
11	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
12	灰褐色	1P195/2	粘質土				少(4.0-5.0)	
13	灰色	2.3Y6/4	粘質土				少(4.0-5.0)	部分多量
14	灰色	2.3Y6/4	粘質土				少(4.0-5.0)	
15	灰色	2.3Y6/4	粘質土				少(4.0-5.0)	
16	灰色	2.3Y6/4	粘質土				少(4.0-5.0)	
17	褐色	2.3Y5/1	粘質土				少(4.0-5.0)	部分多量
18	褐色	2.3Y5/1	粘質土				少(4.0-5.0)	
19	褐色	2.3Y5/1	粘質土				少(4.0-5.0)	

■ 貫入木の含む層

図108 百間堀西側石垣裏込部分埋立造成状況 (S=1/80)



No.	土名	土質	炭化物	粘土	雑物	貫入長(cm)	木の杭の長(cm)	備考
1	褐色	N4	粘質土				中(4.0-7.0)	部分多量
2	褐色	N4	粘質土				少	
3	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				中(4.0-10.0)	少(4.0-5.0)
4	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
5	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				中	少(4.0-5.0)
6	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
7	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
8	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
9	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
10	暗赤褐色	3.0Y4/1	粘質土				中	少(4.0-5.0)
11	褐色	1P195/1	粘質土				少	少(4.0-5.0)
12	褐色	1P195/1	粘質土				多	少

■ 貫入木の含む層

図109 板石敷通路状遺構 上層埋土造成状況 (S=1/80)

板石敷通路状遺構は、素掘りの通路状遺構を埋め立てて、嵩上げて整備したものである。その際、造成土中に多くの遺物が埋め込まれた(図 111)。それらの遺物から判断される時期は 16 世紀後半を中心とするもので、16 世紀末には下らないものである。板石敷き上で検出した遺物についても同様な時期を示しており、確実に 16 世紀末に下るものは確認されない。このことから、板石敷通路状遺構の造営時期と存続期間は非常に限定的なものであると言える。

また、板石敷きの北辺に沿って、幅 0.4m 前後の溝が認められる(図 110・113 断面 c・114 断面 a)。この溝は、板石の敷設後整備されたもので、板石敷き上の排水のために側溝として整備されたものと見られる。この溝は素掘りであり、石垣の下を潜るような位置にあるため、両者が共存したことは考えられない。そのため、石垣の構築以前に、板石敷通路状遺構のみが存在し機能していた時期の存在が考えられる。なお、B 6 杭の 2m 程度北側に、板石敷設後に掘削したと見られる痕跡を断面にて確認した(図 113 断面 d)が、これは溝状にはならず土坑となるようである。その位置から石垣・板石敷通路状遺構が役目を終えた後の所産と見られる。

素掘りの通路状遺構 この通路状遺構(図 112・図版 34下)は、西南西から東北東へと下降しつつ延びる。検出部分の総延長は約 17m である。両端が調査区外へ延びるため確認できないが、板石敷通路状遺構と同様、西は上の道路へ接続し、東は吉野川の深みへ繋がる水路であると考えられる(図 116)。

この遺構は、地山削り出しにより構築され、その様相から 3 つの部分に分けられる(図 112)。まず、B 5 杭付近から西側の部分である。この部分は幅 1m 前後の溝状を呈しており、その底面に 0.2m 前後の段差が 5m に 6 段程度の割合で削り出され、階段状に整備される。B 5・B 6 杭間の中央部付近では、幅 2m 前後と広がるが、非常に浅く平坦に削られる程度で、明確には溝状にならない部分である。この部分の北側から、幅 1m 強・深さ 0.5m 強の溝が東側へ延びており、B 6 杭から東側についてはその溝の南肩に沿って杭列が並ぶ(図 114 断面 b・c、図 113 断面 d)。この溝の内部には川砂・砂質土が堆積しており、水に浸かっていたと考えられる。杭列は、吉野川の downstream のみに認められることから、水の流れに抗して物の流失を防ぐこと、筏や川舟などを牽き上げることやそれらを繋ぎ止めることなどを目的としたことが推察される。そして、中央部の平場は荷揚げ場の役を果たしたことが想起され、この遺構は吉野川を利用して舟運・物資の移動などに用いた通路であると捉えることができる。

この遺構に直接伴うと見られる遺物は確認されない。そのため、構築時期を明確にせず、ただ板石敷通路状遺構の前身遺構と言い得るのみである。

石垣・板石敷通路状遺構・素掘り通路状遺構は、各個の先後関係は明らかであるが、確認される遺物がいずれも 16 世紀後半を中心とするものである。その頃の北庄は、朝倉氏・柴田勝家・豊臣方の 5 人の人物らが、結城秀康の入府まで次々と替わりつつ治めており、誰の代に構築・機能した遺構であるかを特定することは困難である。ただし、北庄城落城・炎上は一度のみであり、火を受けた痕跡や焼土堆積に着目することはある程度の目安となる。この周辺で該期の焼土堆積が確認される例は少なく、板石敷き上の西側の一部にて焼土・炭化物の堆積(図 109)がやや多く認められたのみであった。このことから、板石敷通路状遺構の構築は、1583(天正 11)年以前に遡るものと見られる。石垣は、被熱し煤けた転用石材や栗石が確認されるため、落城後の構築である可能性が考えられる。その石垣の構築を吉野川右岸(北-西岸)の広範にわたる大規模な造作と考えるならば、その構築は比較的治世の長い堀氏二代(堀秀政 5 年間・堀秀治 8 年間; 1585 天正 13 - 1598 慶長 3 年)のうちに想定される。(御蔵)



圖110 板石敷道路狀遺構 (S=1/100)

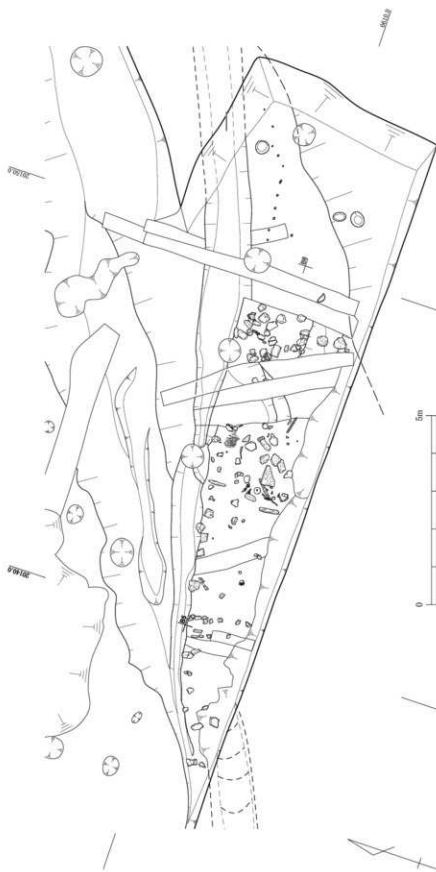


図111 板石敷通路状遺構下層 板石撤去後の状況 (S = 1/100)

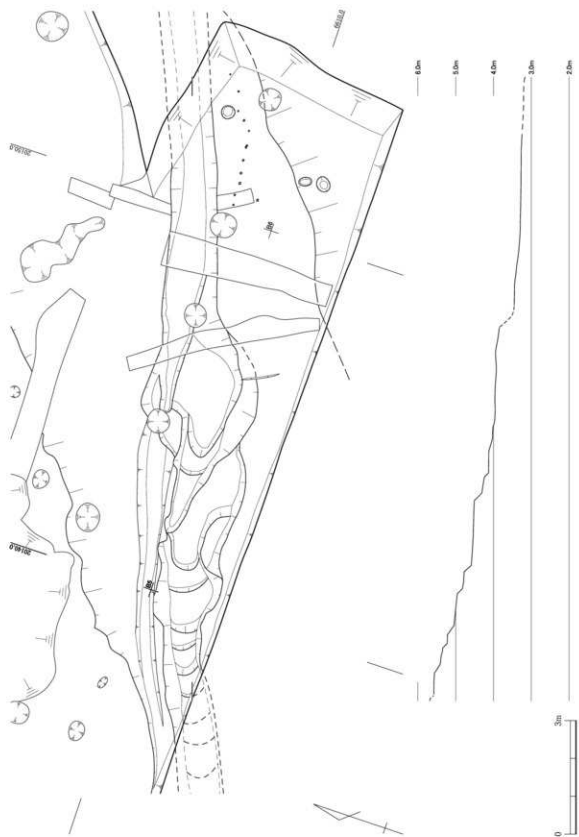


圖112 遊船狀遺構 (S=1/100)

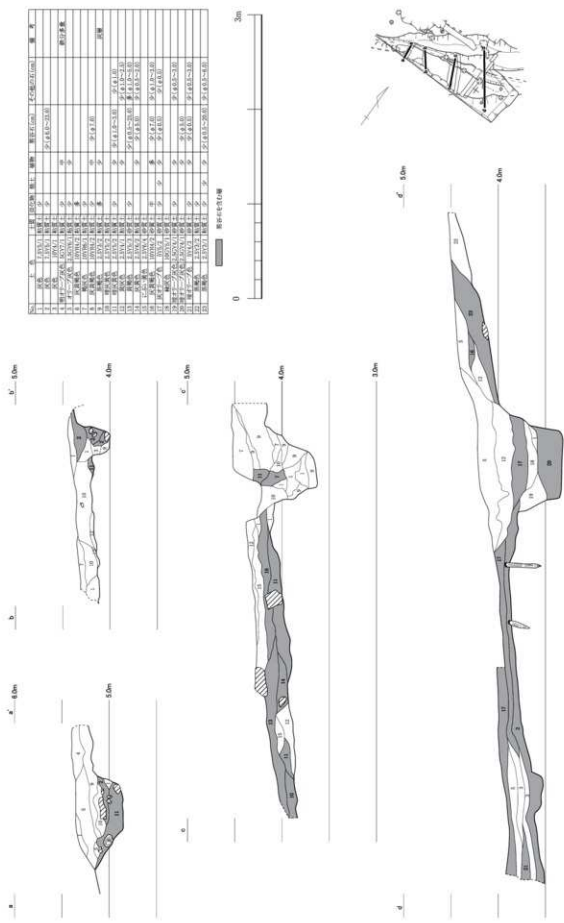
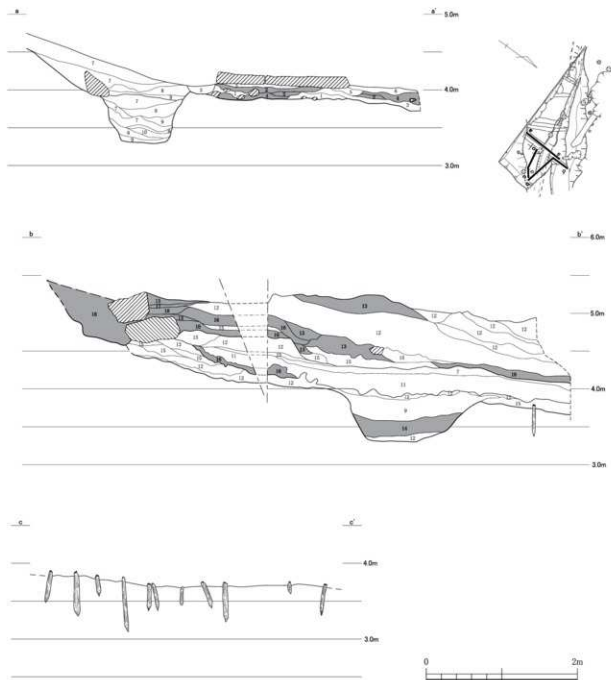


図113 板石敷通路状遺構下層造成土および道路状遺構埋土堆積状況① (S=1/40)



No.	土質	土層	長径(約)	幅	傾斜	厚さ	数量	調査点(No.)	本号地の長径(約)	備考
1	黒褐色	2.5/3.2	粘質土	少	少				中(φ0.5-2.0)	
2	黒褐色	2.5/3.2	粘質土	少	少		少(φ1.0)		中(φ1.0-2.0)	
3	黒褐色	2.5/3.2	粘質土	少	少					
4	オリーブ褐色	3/3.2	粘質土	少	少		少(φ10.0)		中(φ1.0-3.0)	
5	オリーブ褐色	3/3.2	粘質土	少	少				少(φ0.5-1.0)	
6	オリーブ褐色	3/3.2	粘質土	少	少				少(φ0.5-1.0)	
7	緑褐色	3/3.2	粘質土	少	少					
8	灰子(少)褐色	3/3.2	粘質土	多	中				少(φ0.5-2.0)	
9	灰色	3/3.1	砂質土	少	少					
10	灰色	3/3.1	シルト							
11	灰子(少)褐色	2.5/3.1	砂質土	少	少					
12	灰色	2.5/3.1	粘質土	少	少					
13	灰色	3/3.1	粘質土	少	少		少(φ1.0-5.0)			
14	オリーブ褐色	2.5/3.1	砂質土						少(φ1.0)	
15	オリーブ褐色	2.5/3.2	砂質土						少(φ1.0-2.0)	
16	緑褐色	2.5/3.2	粘質土	少	多	多	多(φ0.5)		少(φ0.5)	
17	石灰質の砂質土									
18	石灰質の砂質土									

■ 灰石を含む層

図114 板石敷通路状遺構下層造成土および通路状遺構埋土堆積状況② (S=1/50)

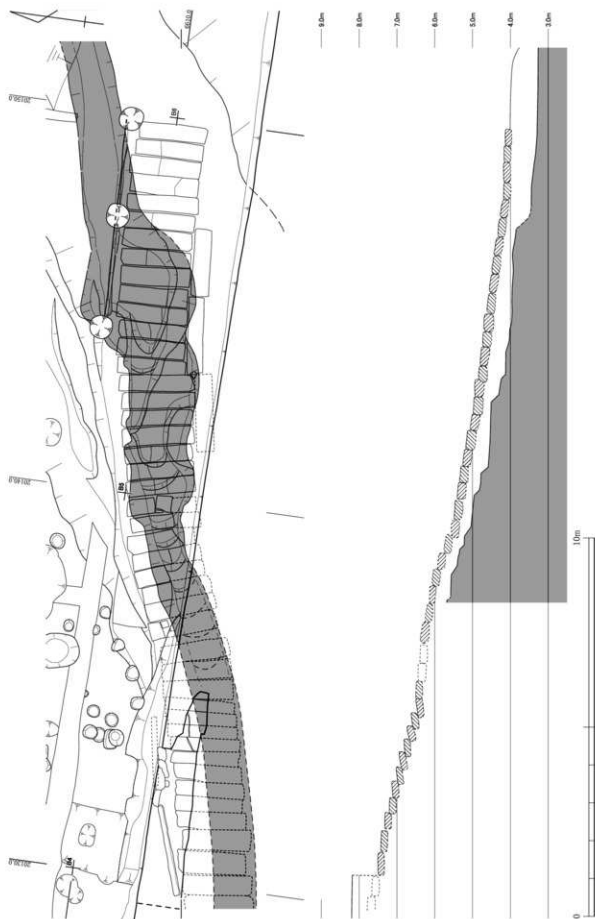
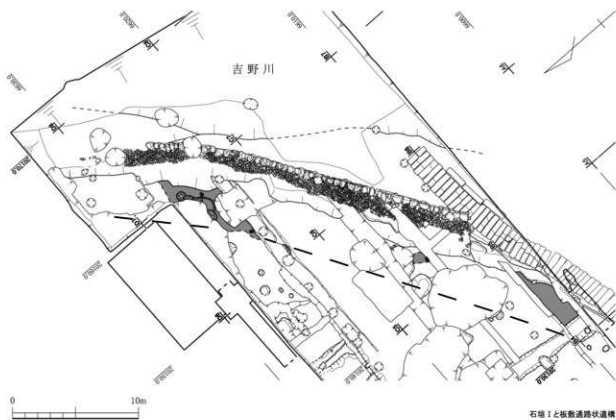
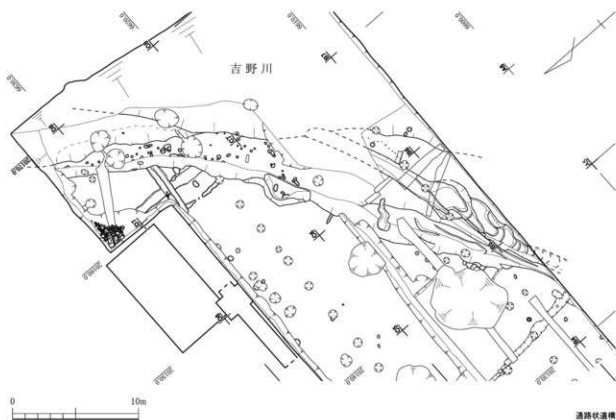


図115 板石敷道路状遺構および通路状遺構 (S=1/100)



石垣 I と板敷通路状遺構



通路状遺構

図116 石垣 I と板敷通路状遺構・通路状遺構 (S=1/300)

井戸 井戸状の遺構は 80基近く確認した。これらは調査区の西半部に偏在しており(図 98~105)、その多くはほぼ同じ位置で何度も掘り直された状況が窺える。大半は、内部構造を持たない素掘り井戸であり、井戸桶や石組を有する井戸は僅かである。以下、状態の良い 9 基を図示し、詳述する。

遺構 9 15は、石組井戸である(図 117)。石組は、大小様々な笏石の割り石を野面に積み上げたものである。その背後に裏込として笏石の栗石が込められるが、均一的な厚みで全体に充填されるのではない。石組は、間口直径約 1 m・高さ約 5 m である。井戸底面には石組はない。掘り方は歪な円形を呈しており、石組はその中央からやや東にずれて位置する。掘り方の断面形は、上部約 1.5m は擂鉢状を呈し、それ以下約 4 m はほぼ垂直である。掘り方の規模は、上面では直径 5.5 m 前後、中位以下では直径 3 m 前後である。検出した遺物は、16世紀後半代を中心とする。

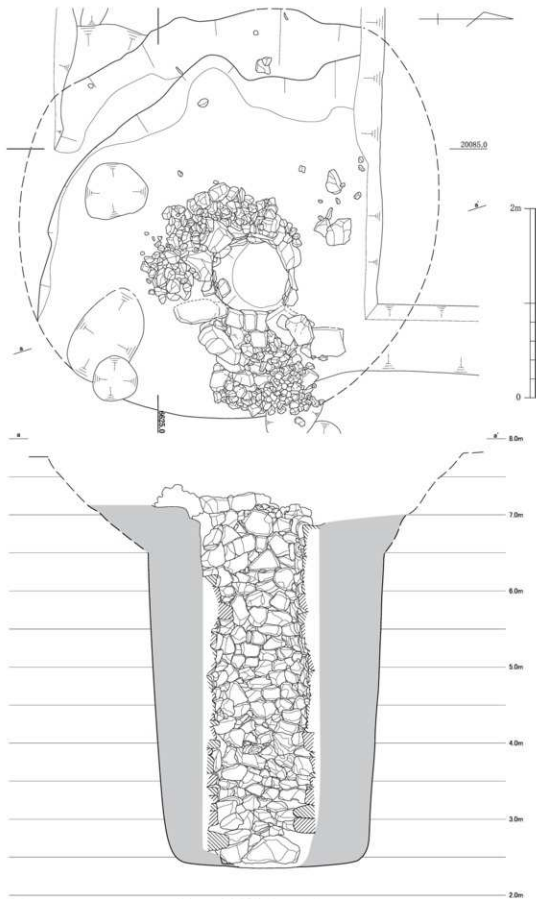
遺構 10 1009は、木製の井戸桶を持つ井戸である(図 118)。残存する井戸桶は、高さ 0.5~0.6 m・直径 0.5 m 前後のものを三段重ねにしており、高さ 1.4 m 前後になる。掘り方は、北西-南東に長い楕円形を呈しており、井戸桶は中央からやや南東に位置する。掘り方の規模は、上面で約 3 m 約 2.5 m、深さ約 5.2 m である。なお、標高 5 m 前後に認められる掘り方の屈曲は、福井地震の影響によりその部分より上層が東側へ移動したことに起因する。検出した遺物は、16世紀後半代を中心とする。

遺構 4 551は、素掘りの井戸である(図 119)。平面形は歪な円形を呈し、規模は径約 8.5 m・深さ約 2.5 m である。標高 6.2 m 付近に福井地震の影響による掘り方の屈曲が見られる。検出した遺物は 16世紀中葉を中心とする。井戸底面から煤まみれの燐鴉が検出された。井戸清灰の痕跡であろうか。

遺構 9 141は、内部に木製の囲いを持つ(図 120)。この囲いは、四隅に支柱を立て、それらを四角く繋ぎ、その周囲を多数の細い竹で囲うものである。この囲いが井戸桶として機能したとは考えられず、竹材が疎らで遮断機能を果たしたとも考えられないが、ここでは井戸とする。囲いの平面形は一辺 0.5~0.6 m の台形を呈する。高さは 0.8~0.9 m を確認した。竹材は長さ 0.5 m 前後のものが残存するが、本来の長さは不明である。遺構の重複が激しく、掘り方の上面での検出ができなかったが、底面付近では一辺 1 m 前後の歪な方形として確認される。断面にて確認される掘り方の深さは、1.5 m 前後である。標高 6.6~7 m に福井地震の影響が見られる。検出した遺物は、16世紀後半代を中心とする。

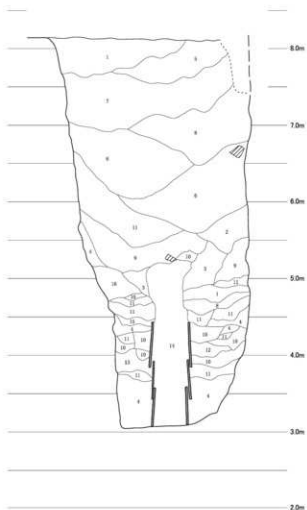
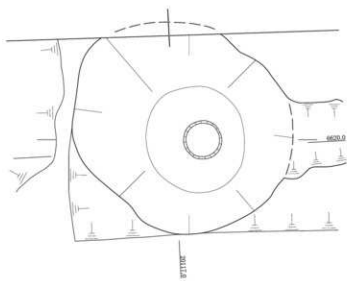
遺構 4 6017・5024・5025・5026・5027は、いずれも素掘りの井戸である(図 120)。このうち 4 5024・5025・5026・5027は、それぞれに重複関係がある。その重複関係だけでは、先後関係の不明な部分が残る。しかし、これらが湧水を求めてより深く掘り直したものであるとすると、その先後関係は 4 5027 4 5024 4 5025 4 5026 と推測される。

土坑 土坑は無数に確認される。そのため、ここではおもに埋土中に遺物の集積が認められる廃棄土坑を扱う。以下に状態の良い 6 基を図示した(図 121~123)。遺構 10 1135は、東側を欠くが、平面形は方形あるいは長方形を呈するものと見られる。規模は 2.2 m 1.7 m 以上・深さ 1.2 m である。上層には、笏谷石片とともに五輪塔の空風輪が廃棄されており、埋土中に炭化物の顕著な層が確認される。遺構 2 226は、砂利敷道路下に埋め込まれた廃棄土坑である。平面形は東西に長い楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、規模は 2.2 m 1.5 m・深さ 0.15 m である。埋土中に焼土の顕著な層があり、笏谷石片とともに数個体分の石臼片が廃棄される。遺構 4 819は、径 1.6 m・深さ約 1.5 m で、埋土中には炭化物と笏谷石片が疎らに含まれ、底部付近にて宝篋印塔の笠部を検出した。遺構 4 534は、近世の廃棄遺構 10 1005により破壊されるが、平面形は東西に長い楕円形あるいは隅丸長方形に復元できる。その規模



遺構9-15

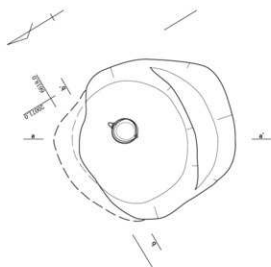
図117 井戸① (S=1/50)



遺構10-1009

No.	土名	土質	灰化層	締土	雑物	断面径(cm)	平均厚さ(cm)
1	暗灰褐色 2.5V/L2	粘質土	少				少(φ1.0)
2	暗灰褐色 2.0V/L2	粘質土	少	少		少(φ10.0~20.0)	
3	暗灰褐色 2.5V/L2	粘質土	少	少		少(φ0.1~2.0)	少(φ0.5~15.0)
4	暗灰褐色 2.5V/L2	粘質土	少				
5	オリーブ褐色 8Y3/2	粘質土	少	少	中		少(φ2.0)
6	オリーブ褐色 7.5Y3/2	粘質土	少	少	少	少(φ1.0~6.0)	少(φ1.0~3.0)
7	黄褐色 2.5Y2/2	粘質土	少	少	少		少(φ0.0~3.0)
8	黄褐色 2.5Y2/1	粘質土	少	少	少		少(φ0.5~4.0)
9	黄褐色 2.5Y2/1	粘質土	少	少	少	少(φ10.0)	多(φ1.0~20.0)
10	黄褐色 2.5Y4/1	粘質土	少		少		
11	灰色 8Y4/1	粘質土	少		少		
12	灰色 8Y4/1	粘質土	少		少		少(φ0.0~1.0)
13	灰褐色 8Y3/1	粘質土			少	少(φ5.0)	
14	灰黄褐色 10Y6/1	粘質土	少	中	少	少(φ0.2~4.0)	多(φ1.0前後)
15	オリーブ褐色 8P4/2	粘質土	少			少(φ1.0)	少(φ0.0)
16	上質赤褐色 2.5YR2/1	粘質土					

図118 井戸② (S=1/50)



透視4-551

No.	土色	土質	厚(層)	層上	層下	厚(層)(m)	径(層径)(cm)
1	赤一ツ輪色	2.5V4/2	粘質土	少	少	少(φ33~40)	少(φ5.5~6.0)
2	赤一ツ輪色	2.5V4/2	粘質土	少			
3	黒褐色	2.5V2/1	粘土	中	少		
4	黒褐色	10V9/1	粘質土	中	少		
5	黒褐色	10V9/1	粘質土	少	少	少(φ1.0)	少(φ5.6~7.5)
6	黒褐色	2.5V2/1	粘質土	少	少		少(φ1.5)
7	黒褐色	2.5V2/1	粘質土	少	少		少(φ0.2)
8	緑褐色	2.5V1/2	粘質土	少	少		
9	赤一ツ輪色	10V9/1	粘土	少	少		
10	褐色	10V9/1	粘土	中	少		少(φ1.5)
11	黒色	10V9/2	粘質土	少	少		少(φ1.5~5.0)
12	黒色	2.5V2/1	粘質土		少		

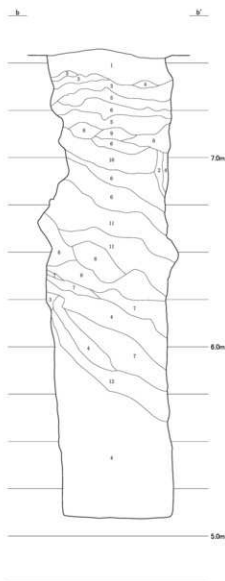
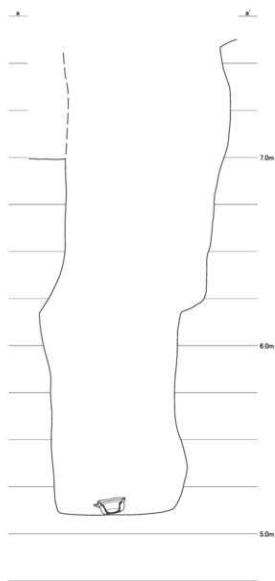
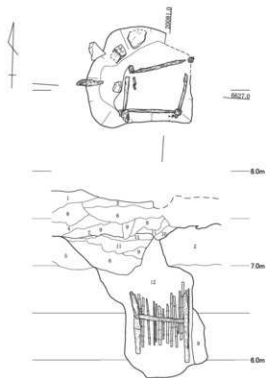


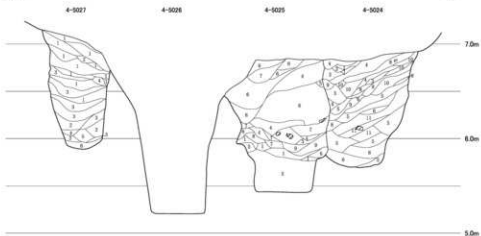
図119 井戸③ (S=1/20)



遺構9-141

No.	土色	土質	図花輪	土上	土下	層	厚さ(m)	柱の径(m)
1	灰黄褐色	2.0Y3/2 粘質土	少	少	少	少	少(φ0.5-1.0)	少(φ0.5-1.0)
2	灰黄褐色	2.0Y3/2 粘質土	少	少	少	少	少(φ1.0)	少(φ0.5)
3	暗灰褐色	2.5Y3/2 粘質土	少	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)
4	暗灰褐色	2.5Y4/2 粘質土	少	少	多	少(φ1.0)	少(φ0.5-1.0)	少(φ0.5-1.0)
5	暗灰褐色	2.5Y4/2 粘質土	少	中	少	少(φ1.0)	少(φ0.5)	少(φ0.5)
6	灰褐色	2.5Y4/4 粘質土	多	中	多	多(φ2.3)	多(φ2.3)	多(φ2.3)
7	灰褐色	2.5Y6/1 サル土	少	少	少	少	少(φ1.0)	少(φ1.0)
8	灰色	5Y4/1 粘質土	少	中	少	少	少(φ1.0)	少(φ0.5-2.0)
9	灰褐色	2.5Y2/1 粘質土	少	少	少	少	少(φ0.5-2.0)	少(φ0.5)
10	灰褐色	2.5Y2/2 粘質土	少	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)
11	オリーブ褐色	10Y3/1 粘質土	少	少	少	少	少(φ1.0)	少(φ1.0)
12	オリーブ褐色	5Y4/2 粘質土	少	少	少	少	少(φ1.0)	少(φ1.0)

W

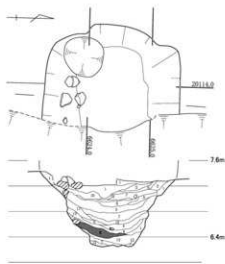


遺構4-5024-5025-5028-5027

No.	土色	土質	図花輪	土上	土下	層	厚さ(m)	柱の径(m)	備 考
1	黄褐色	2.5Y5/4 粘質土							
2	暗黄褐色	10Y3/4 粘質土							
3	オリーブ褐色	2.5Y4/2 粘質土							
4	暗灰褐色	2.5Y4/2 粘質土							
5	暗一オリーブ褐色	2.5Y3/1 粘土							
6	灰褐色	2.5Y3/1 粘土							
7	灰褐色	2.5Y6/2 粘質土							
8	黒褐色	5Y4/1 粘質土							
9	黒色	2.5Y2/1 粘質土							
10	暗一オリーブ褐色	2.5Y3/2 粘質土						少(φ1.0)	
11	灰色	5Y3/1 粘質土							

図120 井戸④ (S=1/40)

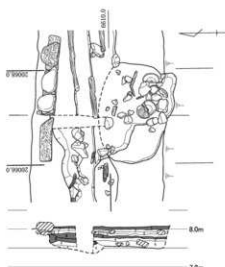




遺構10-1135

No.	土色	土質	炭化物	粘土	植物	層厚(cm)	その他の石(cm)	備考
1	黒褐色	10YR3/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~1.0)	
2	黒褐色	10YR3/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~1.0)	
3	黒褐色	7.5YR5/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~1.0)	
4	黒褐色	2.5Y2/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
5	オリーブ褐色	8Y3/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
6	オリーブ褐色	8Y2/2 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
7	褐色	2.5Y2/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5~1.0)	炭層
8	褐色	5Y2/1 粘土	多	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5~1.0)	炭層
9	暗灰褐色	2.5Y4/2 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ1.0)	
10	オリーブ褐色	2.5Y4/2 砂質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
11	灰褐色	8Y3/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ1.0)	
12	灰褐色	2.5Y4/1 粘土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
13	灰褐色	2.5Y4/1 粘土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	

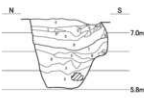
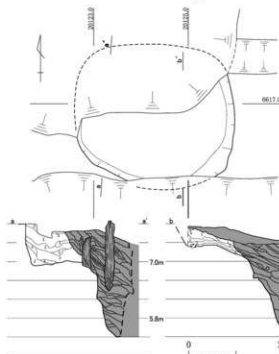
■ 炭化物層



遺構2-225

No.	土色	土質	炭化物	粘土	植物	層厚(cm)	その他の石(cm)	備考
1	灰黒褐色	10YR6/4 砂質土						
2	褐色	10YR5/1 砂質土	少	少	少	多(φ1.0~3.0)	砂粒層	
3	褐色	10YR5/1 砂質土	少	中	少	多(φ1.0~3.0)	砂粒層	
4	褐色	10YR5/1 砂質土	少	少	少	少(φ0.5~0.5)	少(φ1.0)	
5	暗褐色	7.5YR5/1 砂					砂層	

■ 砂粒層



遺構4-819

No.	土色	土質	炭化物	粘土	植物	層厚(cm)	その他の石(cm)
1	黒褐色	2.5Y2/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	
2	灰褐色	2.5Y4/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	
3	灰褐色	2.5Y4/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	
4	オリーブ褐色	8Y2/2 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5~1.0)
5	オリーブ褐色	8Y2/2 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)
6	オリーブ褐色	2.5Y4/2 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)
7	褐色	2.5Y4/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ1.0)
8	褐色	7.5YR/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)
9	オリーブ褐色	2.5Y4/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~2.0)
10	黒褐色	2.5Y2/1 粘土	少	少	少	少(φ0.5)	

遺構4-534

No.	土色	土質	炭化物	粘土	植物	層厚(cm)	その他の石(cm)
1	黒褐色	10YR3/1 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~2.0)	少(φ0.5~4.0)
2	黒褐色	2.5Y3/4 粘質土	少	少	少	少(φ0.5~2.0)	少(φ0.5~4.0)
3	褐色	10YR4/3 砂質土	少	中	少	少(φ0.5)	
4	黒褐色	2.5Y2/2 粘質土	中	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~1.0)
5	オリーブ褐色	2.5Y4/2 粘質土	中	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5~2.0)
6	オリーブ褐色	2.5Y4/1 砂質土	少	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)

■ 黒炭土坑内埋蔵(遺構10-1005-近傍)

図121 土坑① (S=1/60・1/80)

は約 3.4m × 2.2m以上・深さ 0.9mである。埋土中に焼土・炭化物が、わりと顕著に確認される。

遺構 9-31と9-129は、ほぼ同じ位置にて重複する。これは、9-129の埋没後、その上面の窪みを埋め立てたものが9-31であるためであり、巨視的には同一遺構として捉えることも可能であろう。ただし、9-31の埋土は焼土層であり、人為的に意図して埋め立てたと思われる点があるために、ここでは別遺構として扱う。遺構 9-31は、平面形・規模が明確でないが9-129上面の窪みをそれと捉えるならば、平面形は東西に長い歪な楕円形あるいは長方形と見られ、規模は 4.5m × 3m以上・深さ 0.3m以上である。埋土である焼土層中には、拳大～0.5m程度の笏石が多量に埋め込まれている。そして、その層の直下、窪みの直上にて、打刀が鞘に納められた状態のまま検出されている。打刀は、窪みのほぼ中央にて、柄を北側にし、刃部を西側に向けて置かれる。その状態から、打刀を意図的に安置し、埋め立てたものと捉えられている。遺構 9-129は、平面形が東西に長い歪な長方形であり、規模は 4.5m × 3m以上・深さ約 1.5mである。底面の状況と堆積状況から複数回の掘り直しが確認される。最下層北側の落ち込みの周囲に複数の杭が打ち込まれているが、目的などは不明である。埋土中には、焼土・炭化物がある程度含まれるが、上層の遺構 9-31の比ではなく、性格の異なることは明らかである。

土器埋設遺構 ここでは、土器などの埋設・集積の認められる土坑を土器埋設遺構とした。

越前焼の甕を埋設した土坑は5基確認した(図 124・125)。このうち4基(4-52a・52b)は一列に並び、1基(9-123)は単独で位置する。遺構 4-52aは、当初は一遺構として調査にあたったが、その進捗により3基が重複することを確認した。これらと遺構 4-52bが東西に並び、遺構 4-52a中央と4-52bには、甕の底部片が良好な状態で残存したが、他の2基には破片が集積するものの元の状態を保つものではなく、大半が抜き取られている。また、この列の南側に平行して、ほぼ同規模の土坑4基が一部重複しつつ並んでいることから、同時期に8基以上の甕が据えられていたこと、ないしは甕の埋設・撤去が何度も繰り返されたことが考えられる。いずれも、概ね径1m前後の円形あるいは方形を呈する土坑である。

遺構 9-123は、やや南北に長い楕円形の土坑中に、越前焼の甕を埋設する。土坑の規模は1m × 0.9m・深さ 0.6m以上である。甕は、底部を中心にその姿を留めるが、土圧などにより細片となる。甕内部にて、甕の蓋とされたと思われる歪な円形の木の板を確認した。なお、南に隣接する9-06も堆積状況などから甕などが埋設されていたことが窺える。また、周辺の削平が激しいことを考慮すると、こちらも複数の甕が埋設されていた可能性が残される。

遺構 4-520は、土坑内に越前焼の小型の壺を埋設する(図 125)。土坑は、南北に長い楕円形を呈し、その規模は、0.9m以上 × 0.89m前後・深さ 0.35mである。埋土は、焼土・炭化物からなる。なお、東側に重複する遺構 4-838は土器埋設遺構ではない。

遺構 10-5015は、土坑内に10個体以上の土師器皿が集積する(図 125)。土坑の平面形はやや東西に長い楕円形を呈し、その規模は 0.5m × 0.4m前後・残存する深さ 0.1mである。度重なる整地により、遺構上面が削平されており、古代の遺構面検出時においてようやく平面的に検出し得た。検出された土師器皿は古い様相を示すことから、活発な開発が為される直前段階の遺構である可能性がある。

柱穴 柱穴状の遺構は160基以上を検出したが、建物などを構成する状況では確認されなかった。ここでは、柱根が残存するものや土坑底面に礎石が確認されるものなど、状態の良い9基を図示した(図 126)。遺構 2-285・10-1455は、掘り方が径 0.3m前後の円形を呈する。遺構 2-296・4-5033は、掘り

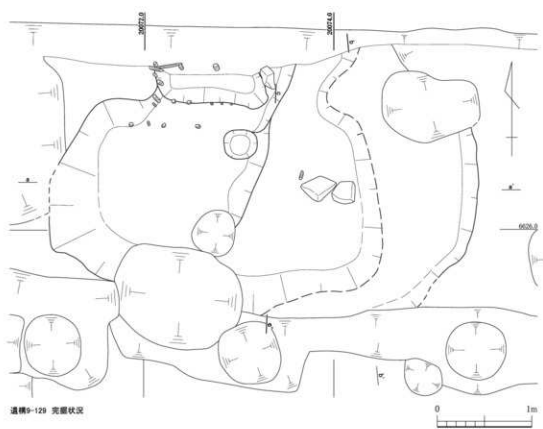
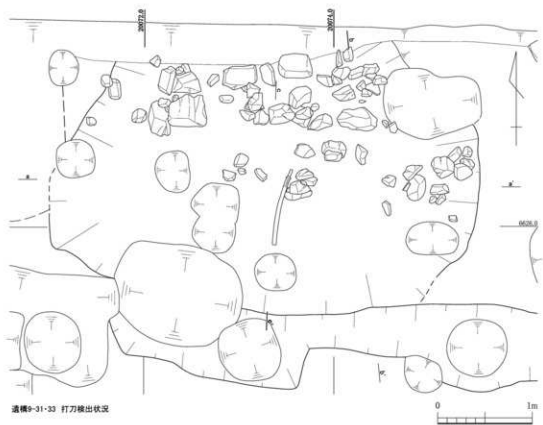
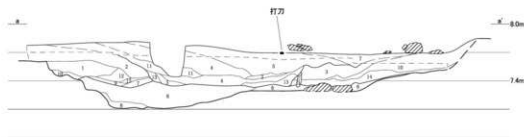
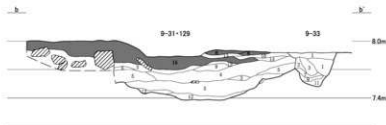


図122 土坑② (S=1/40)



遺構9-129

No.	土色	土質	団粒化	粘土	礫物	貫入石 (cm)	4寸棒の打 (cm)	備考
1	灰チロップ色	014/2	粘質土	少	中		少(4.5)	
2	灰チロップ色	013/2	粘質土	少	少	少(4.5)		
3	チロップ褐色	013/1	粘質土	少	少			
4	チロップ褐色	013/1	粘質土	少	少		少(4.5)~2.0	
5	チロップ褐色	013/1	粘質土	少	少	少(4.5)~1.0	少(4.5)~1.0	
6	黄灰色	2.014/1	粘質土	少	少			
7	暗灰褐色	2.014/2	粘質土	少	中			
8	暗灰褐色	2.013/3	粘質土	少	少	少(4.5)	少(4.5)~3.0	
9	褐色	2.012/1	粘質土	中	多			
10	褐色	2.012/1	粘質土	少	中			
11	チロップ褐色	2.013/3	粘質土	少	少			
12	灰色	014/1	粘質土	少	中		少(4.5)~1.0	
13	黒褐色	2.012/2	粘質土	少	中			
14	黒褐色	2.012/1	粘質土	少	少	少(4.5)~25.0	少(4.5)~30.0	



遺構9-31-33-129

No.	土色	土質	団粒化	粘土	礫物	貫入石 (cm)	4寸棒の打 (cm)	備考
1	黄灰色	2.014/1	粘質土	中	中		中(4.5)~2.0	
2	黄灰色	2.014/1	粘質土	少				
3	灰色	014/1	粘質土	少			少(4.5)~2.0	
4	灰色	014/1	粘質土	少	中	少(4.5)	少(4.5)~4.0	
5	灰色	014/1	粘質土	少	少		少(4.5)~3.0	
6	灰色	013/1	粘質土	少	中	少(4.5)~5.0	中(4.5)~2.0	
7	黄褐色	1019/4/1	粘質土	少	中			
8	黄褐色	1019/5/2	粘質土	少	多			
9	黒褐色	2.012/1	粘質土	少	多			
10	黒褐色	1019/5/2	粘質土	少	多			
11	チロップ褐色	013/1	粘質土	少	少	少(4.5)~3.0		
12	チロップ褐色	2.013/1	粘質土	少	少		少(4.5)~3.0	
13	灰チロップ色	013/2	粘質土	少	少		少(4.5)~3.0	
14	灰チロップ色	014/2	粘質土	中	少			
15	灰チロップ色	014/2	粘質土	中	多	少(4.5)~3.0		築土層

築土層

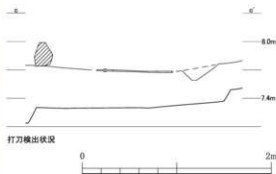
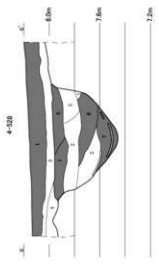
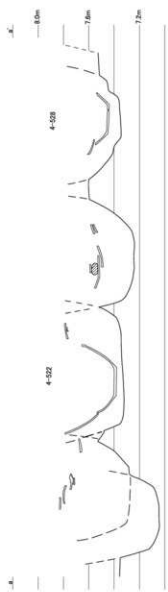
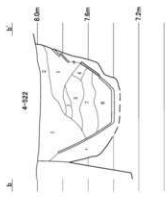
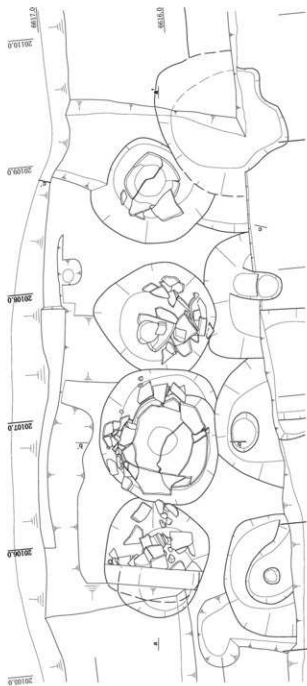


図123 土坑③ (S=1/40)



遺構4-322

層位	土質	用途	構造	形状	幅長(約)	平均埋没深(約)
1	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
2	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
3	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
4	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
5	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
6	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
7	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
8	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
9	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
10	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)

遺構4-558

層位	土質	用途	構造	形状	幅長(約)	平均埋没深(約)
1	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
2	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
3	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
4	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
5	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
6	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
7	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
8	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
9	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)
10	黄砂	貯蔵	土	円形	2.0×2.0	2.4(埋没深)



図124 埋設遺構① (S=1/30)